



「避難所となった土浦尋常高等小学校西校舎」  
戦後、土浦一中校舎として使用されていた頃のもの  
『土浦一中 創立五十周年記念誌』より

土浦の洪水5 ～一ヶ月間の水の生活3～ (霞ヶ浦その32)

1938〔昭和13〕年の洪水では、約1ヶ月間にわたる水の中での籠城生活を余儀なくされました。子供たちは無邪気に舟遊びに興じ、階上より釣り糸を垂れ、女だちとはしゃぎ廻っていましたが、自然減水は遅々として進まず、大人たちは長嘆息を渡らすのみでした。そのため、茨城県は内務省の協力のもとに8台の排水機を設置し、7月13日から作業を開始したところ、次第に水がひき始め、23日午後6時に排水作業が完了し、大地の上で暮らせるようになりました。今号では、土浦中学4年竹村實(中39回)の「一ヶ月間の水の生活」(1939〔昭和14〕年3月発行『進修第42号』所収)《『竹村』と略記》と『学校沿革誌』《『沿革誌』と略記》とで、その避難生活を描いていきます。敬称略。引用文中の【 】内は筆者による注記です。旧字体は新字体に改めました。

7月4日(月) 雨

《いはらき新聞の見出し》  
「濁水の中に五昼夜 逆流の増水に不安昂【たか】まる 水魔蹂躪【どろりん】踏みこむこと」下の土浦町」

《竹村》「今朝は大部朝寝をしたので目覚まして町へ行った。水は廊下でひざ位になつてしまつた。荷物が多くてしづみさうになつたので、はだかになつておし泳いで来た。中城はもう水がなくなつてゐたのに、今日又水がのつてしまつた。」

7月5日(火) 曇

《沿革誌》「萩谷【土浦】町長 避難民慰問ニ巡回ス  
当分休校 考查ハ追ツテ開校ノ上日  
程ヲ発表スル旨ノ揭示ヲ四、五ヶ所ニ貼ル」

《竹村》「今日は朝から、どんよりと曇つて雨が降りさうで、その上風が大部強かつた。宇都さんが阿見へこして行つた。海軍さん【下田町の海軍住宅に住んでいた将兵やその家族】は皆越して【海軍航空隊のある阿見へ】行くやうだ。  
五頭さんが昼すぎになつてもかへつて来ないので石井さんと、柴崎さんと各々一本づつ棹をもつて西門をまはつて救ひに行つた。屋根の上に小舟と一所にねてゐて、波が高くてもどれないので泳いで行かうと思つたが、腹がへつて泳げないのだと言つてゐた。  
四人で力を合はせて波をのり切らうと元氣よく歌をうたつて棹さしたが、とても乗切れないので西門を廻つて帰つて来た。水は更にまして来て、前よりも多くなつてしまつた。」

7月6日(水) 曇

《いはらき新聞の見出し》  
「一ヶ月減水困難 濁水の中に喘【あぐ】土浦」

《竹村》「今日は家の荷物を持ちだして西根の中村君の家へ頼むこととした。僕は先きに泳いで家に行き、父が手伝ひの者と筏でくるのをまつてゐた。  
やつと筏に荷物をのせ、それに大人三人がのつてやつて来た。どうもあぶない様子なので、もどつたらよからうと注意したが、きかなかつた。案の條【案の定】途中でしづみだして、荷物はひつくりかへつて流れ出し、二人はあはてて水中に飛込んだが、父は泳ぎが出来ないので筏にしがみついてゐた。そのかつかうと言つたら何んとも形容の出来ぬ程、おかしなものであつた。已むなく荷をまとめて学校に帰つたが、どうも土浦橋までもつて行けさうもない。土浦橋には中村君のお父さんがまつてゐる筈なので筏で、行けない事を通知に行つた。水は橋より五十米【メートル】位手前まであり、海軍や、多くの人が居た。  
鈴木さんが船をたのんで、荷物を出したので、其の後船を貸りて、土浦橋まで運び、夜になつて荷馬車で西根へ運んだ。西根では風呂をわかつてまつてゐてくれた。今日初めて入浴して畳の上で寝ることが出来たので、何とも気持ちよく、よみがへつたやうな気がしてうれしかつた。」

7月7日(木) 曇

《竹村》「朝早くから近所の人々が洗物の手伝ひをしてくれてゐた。朝の中に西根を出て高津まで自動車で行き、土浦橋より船で学校に帰つた。  
先生と幾度も水汲みに藤澤さんの家に行つた。  
夜になり、皆の様子を見ると、所々に群をなして話をしてゐる。怪我をした人もゐた様だつた。」

7月8日(金) 曇

《竹村》「水を汲みに行き方々を見て歩いてゐた。神龍寺の猿が屋根の上をわたり歩いてゐた。今日は一日筏にのつて遊んだ。」

飯を取りに役場に行つたが、先生は用があつて停車場【土浦駅】に行かれたので待つてゐると、【末次信正】内務大臣がおいでになつた。僕は背広を着て腕章をつけてゐたので、茨城県といふ腕章をつけた肥つた人に新聞記者とまちがはれ、前の方で大臣の顔を見ることが出来た。」



「町役場前」現在の筑波銀行本店の所  
前年の1937〔昭和12〕年に日中戦争が始まり、戦時色を強めていく時代であつた。  
『ふるさとの思い出写真集・土浦』より

7月9日(土) 曇

《沿革誌》「三艘ノ舟二分乗 六人ノ教師土浦町内ノ生徒ノ動静ヲ調査 終日カカル  
宮田学務部長 救護本部巡視ノ途特ニ立寄り学校ノ状況ヲ視察セラル生徒ハ十三日午前十時登校スベキ旨揭示 又地方生徒ニハ一町村 四五人ノ割ニテ 端書【はがき】ニテ通知ス」  
《竹村》「午前中、中学生が集つてさわいでゐた。九時四十分松丸【角治】先生と高塚【半衛】先生が調査にこられ十三日の午前十時に集まる様にと言ひ渡ししてお帰へりになつた。  
午後二時頃飯が来た。今日は珍らしくカンヅメが来た。二時半頃水田【清恵】先生と水澤先生がおいでになつた。四時

半頃役場へ食料品をとりに行つた。水は膝位しかなかつた。」

### 7月10日(日) 晴

《竹村》「今日から食料品、水を【土浦高等】女学校【現土浦二高】へとりに行くことになつたので、中学生三人と先生の四人で行つた。  
九時半、海軍が訪ねて来た。白土君が荷をまとめて越して行つた。  
三時過ぎにチブス【チフス 腸チフスなどの感染症】の予防注射を行つた。夜ミルクが来たので御馳走になつた。大變のどがかわいてゐたので美味かつた。」

### 7月11日(月) 曇

《竹村》「五時半父を真鍋まで送り歸りに水を汲んで来た。真鍋は【筑波線】踏切より百米(新国道)【旧国道6号】位の所まで水につかつてゐた。  
畳表をあらつてほした。畳が腐敗しさうになつたので昨日表をむしりとりつておいたのである。  
夕方中城へ買物に出掛けた。船番をしてゐたが、水は役場の前はなくなつて、アスファルトが見えてゐた。死体が四十数個あがつたと、うはさをしてゐた。中にはふとんがぬれるまで水の来たのを知らなかつたものもあるさうである。  
加藤先生と田口先生が御休息におかへりになり、椎名、長坂、根本、海老原、岩瀬の諸先生をおむかへした。  
西校舎は大分きれいだが、町の方へ行くと、鶏、豚、山羊、犬、猫、等の死骸が表をむしられた畳の残骸と共に汚臭鼻をついて流れてゐる。  
今夜皆先生がかはつたせいとか、九時頃かへつた時は皆ねてゐた。金持も貧乏人も、商人も会社のつとめ人も皆一所にまじつて、ふとん一枚と、毛布一枚位でねてゐる様子を見ると涙ぐましくなつてしまふ。

隣では誰か書き物をしてゐるらしく、ペンの走る音がしづかにきこえて来た。月は雲間に見えがくれし、その下で食用蛙が太い声をしてうなつてゐた。」

### 7月12日(火) 晴・時々曇

《沿革誌》「排水作業二要スル土俵造り始メルモ 人夫不足トノコトニテ生徒ヲ応援ニ派遣ス 約三十名  
チブス予防注射ヲ全避難民ニ行フ」  
先生方は、この避難民にはさまさまな対応を迫られました。松丸角治先生(英語)が、<sup>1933</sup>「昭和8」年<sup>1940</sup>「昭和15」年在職<sup>1965</sup>「昭和40」年に同窓会に寄せられた書簡には、次のような記述があります。  
「……、何人位避難したか覚えてはいませんが、その中には土浦町を働き場にしてゐた物貰い【乞食(こじき)】やゴム紐売【ゴム紐の押し売り】、浮浪者達も、その職場を失つたので一緒に避難して来て、炊き出しのお握りに与【あずか】つていました。が、やがて枕探し【寝ている人や枕元から金品を盗むこと】などをする不埒者【ふちもの】も生ずるに及び、我々職員が不寝番をする破目になりました。更には長期化するに従い不潔となり、蚤【のみ】や虱【しらみ】の発生をみるに至り、DDT【強力な殺虫剤の一種】の粉末を頭からかけて消毒する役まで仰せつかることになりました。  
避難民の中にはアパートと間違えたのではあるまいが、すっかり教室に居ついて、毎朝新聞や牛乳の配達を受ける者や、ここから朝働きの出掛け、夕方帰つて来ては汽車で石岡まで風呂に行くなどという者まで出来るにいたりました。結局何人かは行く処もなく、職もない有様で、土浦町から立退料としていくらかのお金やお米を貰つて立ち退きました。因みに土浦市街地は霞ヶ浦の水位より低いとのことで、一旦浸水するとポンプで汲み出さない限り減水せず、通りは青みどろとなり、食用蛙はいたる処で不気味な鳴声を出し、鯉や鰻を家の中で手捕りにしたというような話も聞きました。」

駅前から国道の真鍋坂下まで市内バスならぬ、市内乗合船が暫くの間往来す

るといふ珍風景も忘れられません。……」

《竹村》「午前七時十分、食料品をとりに行き、水を共にくんでかへる。蚊と蠅が多くて困つたが、蠅取紙【はをりなみとまつた蠅が貼り付くように、粘着性のある薬品を塗つた紙。天井から釣り下げたりして用いる。】が来たので分配した。  
午後役場へ、炭、醤油をとりに行つた。郵便物が一通もこないのので、父と郵便局へ行き葉書をとつて来た。歸りに足へふみぬき【クギなどを踏んで突き刺すこと】をしていたので、医者へ行つて、さいてもらつた。歸りは父におぶさつて来た。」

### 7月13日(水) 曇

《沿革誌》「午前八時ヨリ職員会議十時生徒集会 欠席生徒七〇名  
午後ヨリ郵便局ノ配達手伝ニ生徒四〇名ヲ派遣」  
《竹村》「父と教科書を出して来てすぐに学校へ向つた。真鍋の踏切も出さうになつてゐたので、そこより父におぶさつて学校へ行く、先生の色々な質問に答へて帰る。十二時より新国道にまつてゐたが、三時頃やつと長坂先生が迎ひに来てくれ数百米先きの船までおぶつてくださった。大變有難かつた。  
夜は舟で散歩に出掛けたが、【外西町の】加藤裁縫所の前は畳が一ぱいであつた。」

### 7月14日(木) 曇

《竹村》「今日より学校で飯をたくことになつた。五時半水汲みに行つた時は、浅くてひざ位しかなかつた。  
内務省よりの排水機をすゑつけるので、くぎりをつけるため土俵をどんどん積んでゐた。校庭は浅い所でも腰位ある。避難民は全部で五十人位にへつた。蚊が多いので、かやをつり、第一室には六つがならんでつられた。」

### 7月15日(金) 曇

《竹村》「今日は腹が痛くてちつととしてゐた。水は余りめだつたへり方をしない。九時頃、加藤先生と真鍋へ行つたが、新川が現はれてゐるので引返して桜川に行つた。排水機を取りつけてゐた。今日より始るのださうである。頭も大部毛がのびたので床屋に行つた。国道はもう現はれてゐた。  
此の間二十八日の間、水のために攻められ苦しめられて来たのだ。さうしてこの間にあつて、【霞ヶ浦海軍】航空隊、【水戸第二連隊】工兵隊等々の御骨折りを戴き又多くの友達、特に遠方の友達には、わざわざ数十里の所をお見舞ひに来て戴き、大變お世話になつてしまつた。あ、忘るな六月二十九日! 恐怖と戦慄の間に巨万の富と幾多の尊い生命とは一夜の中に奪ひ去られてしまつたのだ。然し今となつて只歎き悲しんだとて、それが何んにならう。恐れ多くも陛下【昭和天皇】の御宸襟【ごしんぎん 天子の心を悩し奉り御内帑金【ごないぎん 君主の手元にある金】を下し給つたのである。我々は陛下の限りなきお恵みに感泣【かきみどろし】一意復興に邁進【まいしん】し、皇恩【こうおん】の万々に酬ひ奉らねばならない。」

### 7月20日(水) 晴

《沿革誌》「午前十時ヨリ【真鍋小学校協の】鹿島神宮【神社】の誤記」境内ニテ終業式 生徒欠席三五名 十時三十分終了」

### 7月24日(日) 晴

《沿革誌》「避難民全部退去」

### 7月28日(木) 29日(金)

《沿革誌》「校舎大消毒」